

令和元年度第1回神戸市市民福祉調査委員会
計画策定・検証会議ワーキンググループ議事要旨

1. 日 時 令和2年2月6日（木）午前10時00分～午前11時55分
2. 場 所 神戸市役所1号館8階中会議室
3. 議 題 （1）次期市民福祉総合計画策定に向けて

開 会

座 長 選 任

（西垣委員を座長として選任）

議 題（1）次期市民福祉総合計画策定に向けて

（事務局より資料2・3の説明）

○計画策定の進め方について

（委員）

- ・実質このワーキングで出た意見を計画策定・検証会議にあげていくことになる。
- ・現計画策定のときは各課所管の分野別計画について担当者から説明いただいたが今回はどうするか。

（委員）

- ・各施策の強みと弱みについてはしっかり把握しておきたい。
- ・他都市との比較なども含めた神戸市の現状なども把握しておきたい。
- ・市民福祉総合計画の目指しているものに対して、この3年間の成果も把握したい。

（委員）

- ・検証シートは作成されていたが、あれだけでは理解できない。
- ・各計画や各施策の成果と課題について教えていただく機会があればいい。

○アンケート調査について

（委員）

・垂水区でも、ほっとかへんネットで地域アンケートを実施しており、500件ほど返ってくる。そこでもやはり不安感（特に単身高齢者など）は高い傾向の結果が出るので、市民アンケートもどのような結果になるか楽しみである。

（委員）

・過去の反省として、アンケート結果の反映が十分にできていなかったことが挙がる。市民が回答しているアンケートなので、これを基礎とした計画ができれば、市民にも納得してもらえるし、次のアンケート

の回答率の向上にもつながるので、結果の分析はしっかりと行いたい。

○計画の広報について

(委員)

- ・この計画をどうやって広めるかが大事。
- ・現計画の基本理念にもある「ローカルガバナンスの具現化」がどこまで浸透しているかという点、微妙なところ。ことば自体がわかりにくいことも原因がある。
- ・計画書に難しい言葉を出すのはいいが、市民への伝え方を考えたい。それが神戸に住むきっかけになるような。ぜひアイデアを出していただければ。
- ・「支援」と使うとどうしても困っている人のための計画に見える。誰をも含む計画であることを伝えたい。

(委員)

- ・基本理念をすべての市民に届けるためには、解釈を共有することが大事。
- ・「地域ってなに」と考えたときに、ひとりひとりの「生活の場」であり「活躍できる場」であることを伝えるためには、やはり言葉を変えていく必要がある。
- ・市民福祉総合計画は「市民」「事業者」「行政」をつなげる計画。つなぐためには誰もが理解できる言葉に変えていく必要がある。
- ・「参画」とか「協働」を考えると、みんなが自分たちに関係するものなのだと思うものに。

(委員)

- ・どうしても、メリットがないと当事者意識はもちづらい。
- ・計画の中身について、凸凹の凹を支える視点は記載しているが、それだけではすべての人の目はむかない。凸の部分強調して「誇らしくなれる計画」にすることで、みんなに伝わる。そうするとみんながつながる。
- ・若者は「自分になにかできないか」と思っているものだが、方法がわからない。そこで、SDGsなどが、若者を引き寄せるパワーワードとなる。
- ・企業を巻き込むことも重要。企業もなにかしたがるがやり方がわかっていない。わかっていないから児童養護施設にはケーキが集まる。そうではなく、施設退所後の就職先の方が必要であることを伝える必要がある。
- ・それらを伝えることで、みんなの計画となる。

(委員)

- ・厚生労働省白書については、割と優しい感じがでていいる。前半がその年のテーマ、後半が定例的なものに加えてコラム。そういう載せ方もありだと思う。

(委員)

- ・この計画の視聴率を上げたい。人口150万人のうちどれだけがみているか。

- ・例えば概要版なんかはもっとポップに作ってもよい。
- ・計画の HP の閲覧数がわかれば（視聴率がわかる）周知度を PDCA でチェックできる。

○次期計画策定に向けての意見について

（委員）

- ・現計画同様に、「ソーシャルインクルージョン」はやはり外せない。
- ・根底の市民福祉条例については、先駆けて「市民意識」に着目し、「神戸に住んでよかった」というまちづくりを、神戸市民みんなでやっという動機付けとなる条例。法令上の「地域福祉計画」とは少し異なる点もある。それは、市民としての意識をどれだけ作れるかということ。長短関係なく、神戸市に住んでいる人が、「神戸に住んでよかった」と思える大切な計画になることを忘れず策定したい。

（委員）

- ・「市民福祉」とはなんだと考えたときに、やはりシンプルに「神戸に行きたくなる」「神戸で生活したくなる」と思える人が増えたら「市民福祉が充実している」ということになる。一方で、財政にも限りがあることを考えると、やはり市民が当事者意識をもって、どう生きやすくしていくかを考えられるようになることが、次期計画期間（2025年まで）の目標に挙げる必要がある。
- ・さらに、これから考えていかなければならないのは、テクノロジーがこれだけ進んでいる現代なので、市としても活用していく方向性が示せばいい。

（委員）

- ・他都市の地域福祉計画の策定状況を調べると、やはりどの地域も人口減少が課題であり、その中で地域福祉を推進していくうえでは、プレイヤーをどうするかが議題となる。地域福祉計画とは、すべての市民が参画できる計画であり、すべての市民が参画するためにはどうするかを考えねばならない。
- ・社協の活動計画と市の総合計画と連動していくなれば共通の言語化をしていく作業に各都市関心を寄せている。たとえばSDGsをどう盛り込んで、どうやってプレイヤーを増やしていくのかということが議論されている。神戸市は、市民福祉条例の文言でそれを実施できるのではないか。例えば介護保険事業計画などは、どちらかというと専門家向けの計画であり、それを翻訳するものが地域福祉計画になるかと感じている。

（委員）

- ・人口の増減をみると、20代前半が増えているのは、大学生の転入のしてくることも当然あるが、他にも外国人を受け入れる体制が進んでいるからでもあると思う。
- ・「外国人のための福祉」というよりは、「神戸市民の福祉のために、外国人とどう共生していくか」が重要になる。

（委員）

- ・普段ひきこもりや発達障害のかたと接していると、特に本人が若年であるほど、家族が疲弊している。
- ・発達障害児の親などは近所の人に話せなかったり。そういった話ができる場が近所であればいい。

- ・「ひとりじゃないんだな」と感じてもらえるようアプローチを考えたい。

(委員)

- ・学生支援をしていてもいろいろな問題がみえる。
- ・これまでは学生＝健康な人の前提で接していたが、大学に来なくなる学生の背景は、やはり家族の問題が多いことがわかってきた。さらに、どの支援機関にもつながっていない人が多い。
- ・家族のひとりがひきこもりで他の家族が支えているような状態。また、家族もそのことをあきらめている。死ぬまでこれでいくしか仕方ないと思っている。
- ・支援機関へのアクセス方法が伝わっていないということである。計画の課題はどう必要なひとにどうアクセスするかを伝えること。
- ・公衆衛生で予防の観点に置き換えてみると、一次予防が教育啓発、二次予防が早期発見・対応（公衆衛生でいうと治療）、三次予防が社会復帰もしくは現状維持。そう考えると整理しやすいと思う。
- ・特に三次予防（＝悪化させないこと）にポイントを置く。
- ・個別対応でどこにもつながらず終わっていたら意味がないため、それらを集約して二次予防（早期発見）につなぐことが必要。さらに一次予防を行い、これからそうなる人に向けて発信していくことも必要。
- ・認知症「神戸モデル」はうまく市民に伝えられたから、二次予防（早期発見）につながっている。次は一次予防（認知症にならないように予防しようという意識啓発）という風が変わっていく。
- ・これを福祉課題に広げて整理していければいいのではないか。アンケート結果をみて重点を置くところを決めて。

(事務局)

- ・市民福祉総合計画を一次予防にしつつ、視聴率を上げる視点を加えると、成功した施策（認知症「神戸モデル」）をなぜ成功したのか最初に読み物として加え、この観点で福祉施策を見直すところなるという書き方もありかと思う。

(委員)

- ・失敗例も出せばいい。

(委員)

- ・特に社会保障分野というのは予算が莫大となっていく中で、予算を抑えるために、質を下げるのではなく、「早期発見」に取り組むべきかと思う。
- ・認知症「神戸モデル」についても、財政上どう効果があるのか出ればわかりやすい。
- ・長期視点・短期視点どちらかも効果をみることが大事。

(事務局)

- ・だれも病気になりたくないし、不幸になりたくない、ひとりぼっちになりたくないはず。でもずるずる放置しているとそうになってしまう。
- ・おっしゃるように本来社会保障施策というのは長期視点をもって効果を考えなければならない。

(委員)

- ・高齢者の医療受診状況には格差があり、お金のある人は不安になった段階で受診するが、お金のない人は医療と食費が節約の対象となる。そして重症になってから受診し、結局多額の医療費がかかる。この格差をせばめていくのが大事。
- ・定期受診は一回あたりの負担は安い積み重ねとなる。重症になってからの高度医療は一回あたり多額の医療費となる。社会保障費を抑えるというよりは、高度医療費がかかる期間(=その人にとって大変な時期)を短くするための取り組みを考えることが大事。
- ・神戸市の要介護等認定者のうち、要支援者が多いのは誇れることだと私は思う。要介護5を減らすというよりは、要介護5の期間(=大変な期間)をせばめることが大事。その点で、要支援者が多いことは、そこで維持できていると考える。

(委員)

- ・そもそも私が活動を始めた当初、精神障害の方で、40～50歳代の生活保護の方が多かった。彼らの背景を探ると、大学に行って、あわない仕事について、ストレスで精神障害となり、生活保護となるとうパターンが多い。
- ・彼らと大学時代に会えていれば、精神障害や生活保護にならなかったのではと感じ、今活動に取り組んでいる。
- ・大変な状態でスタートになると、支援者の労力も何倍にもなる。そういった点で、長期的な視点を持ち活動に取り組むと必ずプラスになる。
- ・神戸市の10年後をよくするために、取り組むということが大事。愛がある計画を。

(事務局)

- ・早期予防の視点についてだが、福祉になるとどうしても短期視点になりがち。
- ・保健の領域の、例えば糖尿病にならないようにすれば、莫大な透析の医療費おさえられると同じ理論で、福祉の分野でもアプローチできれば。
- ・要支援者の割合が多いのも、長期的なビジョンでみると、いいところであると打ち出せばいい。

(委員)

- ・経済効果は大事。仮説を立ててやっていくのもあり。

(事務局)

- ・要支援の多さについては、市民福祉や地域福祉を支えるパーツのひとつとして考える。
- ・どうしても福祉=マイノリティに目を向けがち、財政も目の前の困っている人に充てがちで、それまでは自助で頑張れとなってしまいがち。

(委員)

- ・今までも福祉の力点が置かれてきたのは、目の前の困っている人を助けることにおかれている。もちろん大切なことだが、そこから何をどうするのがなかなかできていなかった。

・なぜ困ったかをしっかりと把握することで、一番大きな原因のところアプローチできるようになって、計画も動いていけばいいと思う。

・認知症対策についてもまさにそうで、ヘルパー事業所がどんどん増えることを目標にするのではなく、早くわかれば（認知症を）遅らせることができるという仮説のもと、「神戸モデル」が取り組んでいる。

（事務局）

・今回、バックデータの人口状況を資料につけたが、他にも必要なデータがあれば。

（委員）

・国民健康保険料をだれが支払っているのかを知りたい。仮説としてはひきこもりの人のうち8－9割が親に払ってもらっているのではないか。

・また、ひきこもるタイミングは20代が多いと感じる。特に大学を休学してそのままのパターン。退学してからの後追いがどこもできていない。関学なんかは進路不明者をなくしていきたいと考えている。

・進路不明を後追いする仕組みがあれば、一次予防、二次予防につながっていく。いずれ生活保護になる可能性も高いことを考えると、履歴書に空白が増えていく前に働けるように支援したい。

（委員）

・国の調査ではH26の時点で3.6%退学者がいるという数字で出ている。そのうちのほとんどが早い段階で進路不明者となっている。

・神戸の大学の定員から考えると、何千人規模で退学者がいることになる。そんな人数がいるのに、何も手立てできていないのが現状。市としてそこになにかしていくことが必要。

（委員）

・企業は若者を欲している。そのミスマッチをどうにかしたい。

（事務局）

・神戸の大学生は卒業後、神戸に定着しないことが数字として如実に出ている。

・しかし彼らの進路を把握することが極めて難しい。大学ですら把握できていない。個別にアプローチするしかないが、難しい。

（委員）

・企業と学生、1：1ではなかなか難しいだろう。マッチングする人がいれば。

（委員）

・私の大学でもマニュアルを作成し、教員に配布。学生が3回休んだら連絡することとした。それでもアプローチできない場合は学生の未来センターへつないでもらい、センターから親御さんへ連絡する。

・これがうまくいけば実態把握まではできるのではと思っている。くらし支援課にも協力してもらっているが、関係機関につないでいければ、ほっとかない仕組みはつくれるかと思う。まだ成果は出せていな

いが、退学者を丁寧にフォローしていけるかと思う。

- ・小さい私立大学は退学者も多い。協力して発信していきたい。
- ・それが、若者を大事にする神戸としてのアピールポイントになればいい。

(委員)

- ・人口が増えていくことにもつながる。それこそ先行投資になるが。

(事務局)

- ・分野別計画について、個人意見だが、高齢者福祉領域において、地域包括支援センターの強さ（中学校区に1つ）があまり市民に共有されていない。神戸のよさとして認識されていない。
- ・障害福祉領域においても、B型事業所が多いとかの良さは計画に載っていない。
- ・個別計画の強み弱みを総合計画で見えるようにしていくことが必要。

(委員)

- ・企業も自社の強みを知らない社員が多い。
- ・良さというのはやはり外部比較をしないとなかなか気づけない。「あたりまえ」になっている為。
- ・例えばわたしも、神戸市はハローワークもよく動いてくれていることを、他府県の人と話して気づいたことがある。
- ・つまり、市民が誇らしく思えるようにするには他都市比較が必要かもしれない。どうしても悪いところに目がいくので。

(委員)

- ・意識の部分の話になるが、障害者手帳取得が増えているというのは、一定の意識の浸透によることが大きいという解釈がある。つまり表現の仕方だと思う。
- ・要支援者が多いのも早い段階でアプローチできているという説明の仕方ができる。

(委員)

- ・やはり見せ方を考えたときに、神戸市の強みを記載すると、どんどんブラッシュアップされていく。

(委員)

- ・分野ごとに凸凹が見えるような感じ。
- ・次期計画も、神戸市のどういうことがよくて、維持を目指すなどであれば打ち出しやすい。

(委員)

- ・レーダーチャートとか画像のほうがわかりやすい。
- ・神戸市はここが強みだと打ち出す。そうすれば住みたくなるまちにもつながる。

閉 会